

エアコンの修理を頼んだら、自慰してるところを見られて、そのまま舐め尽くされた話。

連日、命に関わるレベルの猛暑だとニュースが繰り返している。今日もまた三十七度を超えるらしい。窓の外の景色が、陽炎でゆらゆらと歪んでいる。

在宅ワークの日で助かった、と最初は思っていた。エアコンの効いた部屋で、涼しい飲み物を片手に仕事ができる。通勤地獄を思えば天国のはずだった。

——そのはずだった。

「……嘘でしょ」

昼過ぎ、ノートパソコンを叩いていた私は、ふと違和感に気づいて顔を上げた。リビングの空気が、明らかに生温い。

エアコンを見上げる。ランプは点いている。運転はしている。けれど、送風口から流れてくるのは、ぬるい、じっとりとした風だ。

リモコンを何度か操作してみる。設定温度を下げ

る。冷房を一度切って、また入れる。それでも状況は変わらない。むしろ時間が経つにつれ、送風口の風はどんどん温くなっていく気がした。

あっという間に室温は三十度を超えた。パソコンの熱と、西日と、自分の体温で、リビングは急速に蒸し風呂に変わっていく。

汗が、こめかみを伝う。首筋を、鎖骨を、キャミソールの内側を、細い筋になって流れていく。

「……もう、無理」

私は仕事の手を止めて、慌てて管理会社に電話をかけた。事情を説明すると、提携している電気工事店から人を回してくれるという。

「本日でお願いできますか？ もう、本当に、干からびそうで……」

『はい、業者のほうから折り返しお電話させますね』

五分もしないうちに、電話が鳴った。爽やかな、

若い男の声だった。

『シュウリ電機です。ご連絡遅くなりました。エアコンの不具合ということで、ですよ？』

「あ、はい、そうです……リビングのエアコンが、冷えなくて」

『了解です。今、近くの現場終わったところなんで、このまますぐ伺えますよ。二時前には着けると思うんで、待っててくださいね』

電話越しでも人懐こさが伝わってくる声だった。少しほっとして受話器を置く。

でも、待っている間にも室温は上がり続ける。仕事どころではない。私はキャミソールの襟元を摘まんでパタパタと風を送りながら、氷を入れた麦茶を一気に飲み干した。

(涼しい部屋、涼しい部屋……)

救いがひとつだけあった。寝室のエアコンは無事

だということ。二台あるうちの片方だけが故障してくれた、という不幸中の幸い。

私は一度寝室に避難して、ひんやりした空気の中で息を吐いた。冷えた空気が、汗ばんだ肌にじんわり染みる。生き返る心地がした。

しばらくして、インターホンが鳴った。

思ったより早い。

『笹川です。エアコン見に来ました』

モニター越しに映る男は、想像以上に若かった。二十代前半だろうか。日焼けした肌に、白い歯。ネイビーの作業着の胸元に『笹川さん』の刺繍。工具ベルトを腰に巻いた、絵に描いたような『電気屋さん』だった。

玄関を開けた瞬間、外の熱気と一緒に、笹川の元気な声が飛び込んでくる。

「こんにちは！ 今日暑いですよ、今日ほんととやばいっすよ。お家の中も暑くなっちゃってますよ

ね？ すぐ見ますね」

目が合うと、彼はにこっと笑った。屈託のない、少年みたいな笑顔だった。

「あ、ありがとうございます。お願いします」

「はい！」

(若い……。しかも、かっこいい……)

自分より確実に年下の男の子に、なぜだかドキッとしてしまった自分に狼狽える。汗で張り付いたキャミソールの上に、慌てて薄手のカーディガンを羽織り直す。

笹川さんはリビングに通されるなり、リモコンを操作し、送風口の風を手で確かめ、天井の室内機を見上げて「あー」と何かに納得したような声を漏らした。

「たぶんこれ、室外機のほうっすねー。ガス漏れか、コンプレッサーかなー。ちょっと外、見てきていい

すか？」

「あ、はい、お願いします……」

「一時間くらいかかると思うんで、涼しいところで待っててくださいね？ 寝室のエアコンは効いてるって言ってましたよね？ そっち避難しちゃってください」

「あ、でも、そんな暑くて笹川さんは大丈夫ですか？」

「俺は大丈夫です！ 暑さに強いタチなんで！」

汗を拭いながら、笹川さんはにっと笑って玄関を出ていった。彼が去った後の玄関に、ふわりと、爽やかな汗の匂いが残った気がした。

(カッコいい、かも……)

ぼんやりしたまま、私は寝室に戻った。

ドアを閉めると、外の熱気が嘘みたいに空気がひんやりしている。全身から力が抜けて、私はふらりとベッドの縁に腰を下ろした。

汗が、まだじわじわと引かない。カーディガンを脱ぐと、その下のキャミソールが、汗で肌に張り付いていた。胸の谷間にも、お腹にも、汗の粒が浮いている。ショートパンツの内側も、なんだかぬるぬると心地悪い。

シャワーを浴びたい。でも、彼が戻ってきたときに濡れ髪で出るのも変だ。

仕方なくキャミソールの裾を摘まんで、パタパタと胸元に風を送る。冷房の風がその隙間に入り込んで、汗ばんだ肌をひやりと撫でていく。

(……笹川さん、年下だと思うけど。イケメンだし、スタイルもよかったな……)

作業着越しにも、肩や腕の筋肉がはっきりわかる体つきだった。ちゃんと体を動かして働いている人の、硬めのライン。

(エアコン修理、結構きつい仕事なんだから、むしろそっちのが普通かな……。ああいう人って、どう